栗田晃宜
元 香川県立盲学校教諭

聞き手＝塚田美紀（世田谷美術館学芸員）
※後半は岩崎清（NPO 法人視覚障害者芸術活動推進委員会）も参加

特別支援学校での経験――生徒が考え、参加するには

塚田：栗田さんは大学で彫刻を学び、美術の教員としての最初のお勤め先は特別支援学校でした。子どもの絵を描き直す教師がいる、それに対抗するのが自分の仕事だ、と強く感じる出来事があったそうですね。

栗田：特別支援学校では、ティーム・ティーチングといって、図工や美術の授業でも他教科の教員がいっしょに入ります。ある日、いわゆる頭足人、つまり頭から直接手足が出ている人間を描いた子どもがいて、その絵に対して、ある教員が「服も着せよう」と言ってズボンなどの服を描き足した。私は初任ながら「やめてください！」と叫んでしまいましたが、かといって自分に十分な指導ができるわけでもない。でも、服を着せるのは、私の言葉で言いますと「人格を汲み尽くしてしまう」許しがたい行為でした。子どもに自分で考えさせて、描いてもらうのが本当です。子どもの人格とは汲めども尽きない、どんどん湧いてくるもののはずです。それ以来私は、自分が同じことをしてしまっていないか、子どもの人格を守るように、汲み尽くさないようにやれているか、常に自問しながら仕事をするようになりました。

塚田：子どもが器だとして、そこに穴を開けて水を汲み出してしまう教育、そういうことをしてはいけないというイメージを持たれたのですね。もう一つ、栗田さんがこの特別支援学校時代に委員として取り組まれた、「全国高等学校総合文化祭」のエピソードについて教えていただけますか。

栗田：その名の通り、全国の高校生たちによる文化の発表の場が「全国高等学校総合文化祭」です。その担当になった時に、生徒がそこに「参加する」とはどういうことなのか、と考えました。さまざまな障害のある多様な子どもに参加してほしいと考えたときに、盲学校の子どもにはどう参加してもらおうかと。全盲の子どもにとって美術は縁遠いかもしれない。でも、もしさわれる作品が 1 点でも出品されたら、盲学校の子どもも参加できる。そう思って、大会の準備の委員会でさわれる作品の出品を提案したのですが、他の教員からダメだと言われました。壊れる、とか、作品はさわるものじゃない、とか。本来、そこを決めるのは出品する高校生自身のはずです。でも高校生に意見を聞く前に、この提案は潰れてしまったのです。

塚田：盲学校ではそもそも美術の授業を選択できない時代だったと伺いました。でも重複障害の生徒さんは選択できたそうですね。そのような高校生が作った作品は、その総合文化祭には出品されたのですよね？

栗田：重複障害の生徒たちが作るものは小ぶりなんですね。当時の委員会や、盲学校の担当教員からは「小さくて見栄えが良くないからダメだ」という意見が出ました。さすがにそれには抗議しました。

塚田：なるほど…。さまざまな壁にぶつかりながらの勤務だったのですね。

盲学校での試み――美術館と連携する

塚田：そうしたさまざまな経験を経て、1997 年からは高松にある香川県立盲学校に赴任されます。以後、堰を切ったように、というべきか、猛烈な勢いでさまざまな試みを展開されます。赴任されて最初にやろうとしたのが、美術館との連携。生徒たちの美術鑑賞に道を開かれました。

栗田：高松市って小さいんですね。盲学校は市の中心部にあり、歩いて 25 分くらいのところに高松市美術館もある。これは使わなければ、と思いました。香川出身の彫刻家・速水史朗の展覧会をやっている時でしたが、生徒たちを連れて行きたい、何かいっしょにやりたい、と美術館に電話をしたら、「今ちょ

うど作家が来ているから直接相談してみますか」と言われ、出かけていきました。石彫と陶の作品が出品されていて、石彫はさわってよい、でも陶はダメだと言われました。陶はダメ、というのは美術館としての方針だったかと思います。見えない生徒にとっては、その作品がどんなに重要でこわれやすいからといったって、さわれなければ意味がないと思ったのですが、そのときはともかく石彫をさわりに行く、ということで、10 数人の生徒たちを連れてでかけました。

塚田：それは開館時間中ですか？

栗田：はい、普通の時間帯に行きました。私が解説するということではなく、学芸員さんの解説を聞きながら、私自身も生徒たちといっしょに作品をさわっていきました。美術館との事前の打ち合わせでは、内容よりも注意事項の話が多かったですが、それでも当日はとても楽しかった。

塚田：そしてその翌年の「ロダン展」でも生徒さんを連れて行かれたのでしたね。

栗田：はい、これは大きな巡回展でした。市美の学芸員さんから、「フランスのロダン美術館から視覚障害者担当の学芸員がいらっしゃることになったから、生徒さんたちは鑑賞するだけでなく、表現活動もできます。ぜひ生徒さんを連れてきてください」とお話がありました。フランスの美術館にはそういう担当者がいるのかとびっくりしました。それをきっかけに、美術館の内部の人や、県全体として作品をさわるということに対する認識が広がったのではないかと思います。高松市美術館所蔵のロダンの作品は、それ以降、いつでもさわれる作品ということになりました。ただ、この作品は台座が高さ 50 センチくらいで、その上にほぼ等身大の人物が載っているので、さわるといっても、椅子か何かに乗らないといけません。また、このサイズですと、うんと近づかないと見えない弱視の生徒には、全体像がつかめません。

塚田：なるほど…。何もさわれないよりはさわれた方がいいのでしょうが、そこで終わりではないわけですね。見えない人が本当に作品にアクセスできるかというのは、そうやって実際にやってみないと、美術館側もわからない部分があると思います。

絵画鑑賞のためのオリジナル教材を制作する

塚田：さて、栗田さんは次に、香川県文化会館とも連携されて、日本画の展覧会で生徒さんたちの鑑賞と表現を試みています。

栗田：小倉遊亀の作品《径》を、最初は触図にしようと思っていたのですが、それではつまらないなと感じました。触図をつくってそれを鑑賞するだけでも、もちろん生徒からはたくさんの言葉が出て、それなりに豊かな体験はできますが、あらかじめ結果が見えている感じがあったんですね。それよりは、もっと生徒自身の表現につなげたい、「自分たちだったらどうするか」という思考につなげたいと思い、パズルのようなものを作りました。絵の中の要素であるお母さん、子ども、犬を、好きな位置に置けるようなものです [fig. 1]。絵の縁を立体コピーで浮き立たせ、その枠内にピースを貼ったり剥がしたりできるようにして、対話をしようと。それを学校であらかじめやってから、文化会館に作品を見に行きました。

fig. 1　小倉遊亀《径》を触図にする

塚田：生徒さんにとって触図をさわる、というのはおなじみのことだったと思うのですが、自分でピースをうごかして構成できる触図、というのは初めてだったのですよね。どういう感想が出ましたか。

栗田：まずはサイズへの驚きですね。それから、絵の要素の並びが実際にどうなっているかを聞きなが

ら、学校での作業を思い出して、「自分が先頭を歩くのは怖いからお母さんを先にしたんだ」とか、「まず犬が歩いていって、自分は２番目に歩くのがいいと思った」というように、自分の思いも言葉として出てきました。

塚田：文化会館とのコラボについて、もうひとつお話しいただきたいのですが。ルオーの作品を鑑賞するための教材を制作されていますね。

栗田：はい。文化会館は「アートモバイル」という名の移動美術館をやっていて、車に作品を積んで学校に来てくれます。2003 年のアートモバイルにはルオーの作品があり、全盲の生徒と弱視の生徒がいっしょに鑑賞できたらと思って、触図を作りました。ルオーの作品に特徴的な太い輪郭線を、立体コピーで表現したものです。何年かあとには、樹脂製のレリーフ状の触図も作りました [fig. 2]。

fig. 2
ルオーの作品を触図にする

塚田：輪郭線というのは、あくまで２次元平面の絵画にしかないものですね。現実の３次元世界では、ものには輪郭線はありません。輪郭線という特殊な概念を全盲の生徒さんたちに伝えるために、栗田さんはどのような方法をとったのですか。

栗田：輪郭線については、まず長い棒を用意しました。それを腕の付け根で固定するように生徒に持ってもらいます。私は生徒から離れて、棒の先端が私の頭に載る位置に行きます。まず生徒に対して正面向きに立ち、生徒にはゆっくりと、私の頭から耳、肩へと棒を動かしてもらうのです。すると正面向きの人間の輪郭がわかります。次に私が横を向き、同じことをしてもらいます。すると今度は、額から鼻、あごといった形を棒がなぞることになります。横を向くと形が違うね、とわかるわけです。

塚田：これは面白いですね。生徒さん自身が棒を使って、まさに輪郭線を描くことになります。見える世界ではそういう約束があるのだな、と頭で理解するだけでなく、自分で実感できる。この棒を使って、栗田さんはさらに遠近法についても説明されるのですよね。輪郭線もそうですが、遠近法、つまり遠くのものほど小さく描く、というのも２次元平面に独特の約束事です。

栗田：遠近法については、直径 20 センチほどの円の形を開けた板を用意しました [fig. 3]。まず、生徒が棒を握っている手のあたりにその板を差し込み、円の輪郭をなぞってもらいます。手元でなぞる感覚です。ところで、この棒は３メートルくらいまで伸びるものなのですが、次は３メートルに伸ばした状態にして、その先端に同じ板を差し込み、再びなぞってもらう。ずいぶん遠いところにあるものをなぞることになりますが、生徒は「あっ」と言います。腕を少ししか動かさなくてもなぞれるからです。これで「遠いものの輪郭は小さい」と実感できます。

fig. 3
輪郭線や遠近法など、絵画平面特有の約束事を理解するためのオリジナル教材

さらに、この板を少し斜めにした状態で、円の輪郭を棒でなぞってもらうと、楕円になっていると気づきます。コップは丸い形なのに、なぜ絵画では楕円として描いてあるのか、ということがわかります。ついでに、本当に楕円の形にくり抜いてある板も棒でなぞってもらいます。円の板を斜めにしたものとの違いは分かりません。「騙しや！」ということにな

るのですが（笑）、まさに絵というのは騙しなんですよね。

町工場と連携して「触図筆ペン」を開発する

塚田：栗田さんは常にこのように、理解してもらうにはどうしたらいいか考え、ご自身で教材を開発してこられました。蜜蝋を使って描けるペン、「触図筆ペン」を、大田区の町工場とコラボして開発されますね。

栗田：手にベトベトくっついて嫌な匂いのする粘土が気持ち悪くてさわれない、という生徒たちのために、粘土を何十種類も探すなかで、まず蜜蝋粘土に出会いました。蜜蝋粘土は、湯煎すると溶ける。そこに筆を突っ込んで、絵の具のようにして紙に描くこともできるのです。冷えると固まるので、描いた後で筆のあとを確かめることができる。美術鑑賞では常に線のことが話題になりますが、「勢いのある線」というような、表現の質に関わることが、立体コピーではどうしてもわからなかったのです。蜜蝋と筆を組み合わせたら、生徒にそういうことをわかってもらえる。他方、授業でグルーガンに入れて使うホットボンドを使っていたのですが、ある時私が火傷をしてしまい、生徒から「もっと安全なものを作ってよ！」と言われていました。そうするうちに、蜜蝋、筆ペン、グルーガンのようなものを組み合わせたワックスペンを開発しよう、となりました。

塚田：なぜ、わざわざ開発しようと思われたのですか。蜜蝋を溶かして筆を浸して、という方法ではダメだったのですか？

栗田：溶かした蜜蝋に筆を浸す方法ですと、一度に短い線しか描けません。「触図筆ペン」だと、蜜蝋を溜めておけるので、長い線が描ける。そして誰でも使えるのです。盲学校の生徒たちにとって、自分たちでもさわってわかる線を描く、というのは大変な筆圧が必要なことでした。でも「触図筆ペン」は2歳の子どもでも使える、という点が全く違います。

塚田：このトークが終わったら「触図筆ペン」を体験していただけますので、みなさん楽しみにしていてください。

あたらしい触図制作へ

塚田：さて、前半の最後に、改めて「触図とは？」ということをお話しいただきたいと思います。今まで何の説明もなく「触図」と連発してきましたが、いろいろなタイプのものがあります。栗田さんご自身は、どのようなものが欲しいと思ってこられたのか、そのきっかけなどを教えてください。

栗田：全盲の子どもたちを美術館に連れていくときに必要だな、ということがまず一つ。それから、従来のさわって使う教材というのは、特に美術に関するものの場合、途中に大きなギャップがあります。幼い子どもが最初にふれる絵本は、毛糸ですとか、さまざまな素材を使い、ものの形もわかるように工夫されていますが、そのあとはいきなり点々の世界、点字の世界で、殺風景になります。その間を埋めるような触図を作りたかった。例えば、輪郭線を示すだけでなく、せめてレリーフ状になっていて凹凸が表現されているもの。最初は紙版画の方法で凸凹を表現したこともありました。触図の材質もいろいろと試行錯誤しました。柔らかすぎる素材はさわる人にとって頼りなく、表面がざらついている素材は指が引っかかってしまうので良くないとか。

塚田:それで行き着いたのが、「真空成型機」ですね。

栗田：はい。お豆腐のパックをつくるのと同じ原理の機械で、樹脂で型を取るものです［fig.4］。

fig.4
触図を作るための真空成型機

昔は盲学校にも似たような機械がありました。点字の教材を複写するのに使っていた。香川で１台もらいうけて、改良して触図を作ってみました。真空成型機で作った触図は、かなり細かい部分まで再現ができるだけでなく、軽くて持ち歩きにも便利なので、美術館に持ち込めるという利点もあります。作品の前で、触図を使いながら生徒と対話ができるのです。

塚田：そんな地点にたどり着いた栗田さんをご紹介くださったのが、岩崎清さんです。触図を作るなら栗田さんにお願いしたい、ということでした。ここからは岩崎さんにもご登場いただきます。

岩崎：生徒の意欲を汲み取って、それをどういうふうに技術的に可能にしていくかという栗田さんの試みには、大きな興味を持っていました。この10数年、イタリアやフランスの触図をいろいろと見てきましたし、世田谷や横須賀のレクチャー・シリーズでも紹介してきましたが、栗田さんが編み出した方法で作る触図は、ヨーロッパのものとはまた違う、新しい世界を切り開くのではないかと直感したのです。私は制作者でもないし、美術館の人間でもないですが、両者をつなぐのが自分の仕事だと思っていますので、栗田さんと美術館をお繋ぎしたわけです。

さまざまな課題

塚田：この美術館に特徴的な「素朴派」を中心としたコレクションの中から触図の試作品をつくれたらと思い、「アンリ・ルソーから始まる―素朴派とアウトサイダーズの世界」という展覧会（2013年）の図録をお二人に渡して、3点選んでいただきました。見えない方にとって取り組みやすい作品があるだろうと思ったので、私からはあえてリクエストをしておりません。※

岩崎：二人とも選んだのが、ルソーの《フリュマンス・ビッシュの肖像》です。私はこのほかにカミーユ・ボンボワ、そしてアンドレ・ボーシャンという、素朴画家として比較的知られている作家の作品を選んだのですが、栗田さんはビル・トレイラーと久永強という、あまり知られていない二人の作品を選びました。それを知って、私は「素朴派」という括りにとらわれすぎていたなと思い、栗田さんの選択したもので行こうと決めました。

塚田：なるほど。では栗田さん、なぜこの3点を選ばれたのでしょうか？

栗田：まず、ビル・トレイラーを選んだのは、絵の中に筆の線がたくさん入っていたからです。それを再現してみたかった。しかし実際に試してみると、筆の線を表現した部分はノイズが多くなってしまい、本来読み取らなくてもよいようなことを読み取らせるものになってしまったのです。そこで樹脂ではなく、紙の触図にしようかとも思ったのですが、強度の問題がある。結局、当初狙っていた「筆の線を再現する」ことは断念しました。久永さんの作品を選んだのは、日本人作家を入れたいと思ったからです。痩せほそった体を触図で表現してみたいと思いました。
ただ、こちらの美術館にお邪魔して実際の作品を見るという機会がなく、図版だけを頼りに制作したことに加え、作る途中で視覚障害の方に試してもらうという重要な機会も逃してしまった、という問題点があります。予定していた日に台風が来てしまって…。そのような事情があり、どうなのかな、という思いはあります。また、依頼を受けていたサイズはA3ですが、実は盲学校の事情を考えて、A4を作りやすいように機械を改良してしまっていたので、A3の制作が難しくなっていたのです。その後、樹脂ももっと良いものが見つかったので、それを使えばA3でもできると思う。これから試して、より良いものを作りたいです。

岩崎：栗田さんは今回のものに至る前に、2回、試作品を作ってくださっています。それらと比べたら、今回のものは格段によくなっていることを、私から申し添えたいと思います。

岩崎：今日は《フリュマンス・ビッシュの肖像》について見ていきましょう［fig.5］。A4サイズにして、

この人物のディテールがわかるようにするというのは至難の業だったと思うのですが。例えば制服のボタンなどは、かなり小さくなりますね。

fig.5　アンリ・ルソー《フリュマンス・ビッシュの肖像》を触図にする

栗田：最初は手芸良品店を回って、ビーズを探したんです。ボタンを表現するのにいいかと思ったのですが、試してみたら、指先への刺激が強すぎてダメでした。それから、左の腰から下げられているサーベル。足にピッタリくっついているように描かれているので、これをどう表現するか、とても悩みました。足ではないのだ、ということを表すために、あえて絵とは違う表現、サーベルと足の間を開けるなども考えましたが、今回はひとまず、「絵に正直に作る」という考え方を採用しました。元の絵で見ても、サーベルと足の区別はつきにくいのですから、触図の方でもわからないままに表現する。

塚田：なるほど。原画でわからないものは、触図でもわからないものとして表現する。それはそれで面白い考え方です。

岩崎：今回の試作品はA4ですから、細かい部分の再現はどうしても難しいのです。でも、今の問題はA3サイズでの触図が可能になれば、解決すると思います。いずれにせよ、絵画を目で見ている状態と、手でさわって確かめるのとではやはりずいぶん違いがある。全く同じにはならなくても、その間を少しでも埋めようと努力するのが、見える人間の務めだと私は思っています。また、私の思いとしては、こうした触図をいろいろな美術館が持つようになることが最大の望みです。本来は国がやるべきことだとは思いますが、美術館と栗田さんのコーディネート役を、私のNPO法人で引き受けたいと思っています。

塚田：栗田さん、岩崎さん、今日は本当にありがとうございました。

2018年8月8日（水）世田谷美術館
2019年2月23日（土）横須賀美術館
※横須賀美術館の講演会では、谷内六郎などの所蔵作品を触図にしました。